
英雄の後始末

吉田 匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄の後始末

【Zコード】

N7713W

【作者名】

吉田 匠

【あらすじ】

祖父の蔵で見つけた黒い本の中の魔法陣を興味本位で描いてしまった異世界にやつて来た誠治。

本当なら無双するほどの強さなのに何故か気苦労が絶えず……

1話 黒い本

8月も中旬を過ぎたが未だ暑さが緩まない日々。

が、此処はとある山中にある道場。

早朝の為か暑いどころか肌寒い。

道場内は張り詰めた空氣の中、青年が座禅を組み老人がその背後に佇んでいる。

「…………」

「喝ーー！」

「バキヤツ！」

「ぐおわあーーー！」

老人の手刀が青年の脳天に直撃し余りの激痛に転げ回る。

「邪念が出とるぞ」

「出るに決まつてんだろーー！」

青年は涙目になりながらも老人に怒鳴りつける。

「休みのたびに人をこんな山奥まで連れて来やがってーー！ 本当なら今頃京子ちゃんや香ちゃんの水着姿を拝みながらキャツキャツウフフしてたんだぞーー！」

血の涙を流さんばかりの叫びである。因みに京子、香は大学内でもトップクラスの人気を誇る。

「ほつほつほつ。何も出来んべタレの癖にのう
しかしそんな青年の叫びなど全く氣にも止めない老人はカラカラと
笑う。

「ぶつ殺す」

プチッとどこかの線が切れたのを自覚した青年が老人に襲い掛かる。

「遅いのう」

凄まじい速度で迫る青年だつたが老人はあっさりと交わし右手首を
掴むと床へ叩きつける。

「げはつ！！」

受け身をとる事も出来ず身動き一つとれない。

「全く……感情に支配されとはいかんと散々言つたじやねいへん」

「つ……るせえ……糞爺い……」

「ほつほつほつ、減らず口が叩けるなら大丈夫じゃの。ほれ飯にす
るが」

「ちくしょー……」

青年の名は山上 誠治。

都内の大学に通う21歳。

何故誠治が此処に居て何をしているのか説明しようと思つ。

此処は誠治の祖父であり先程誠治を叩き伏せた老人、山上 清十朗の住居兼道場である。

休みになると清十郎は誠治を鍛えていた。

とは言つても誠治は好き好んで今の現状に居る分けではなかつた。最初は10歳の頃。

その頃はそれ程まだ抵抗もなく此処へ来ていた。言わば遊びの延長。

しかし年を重ねていくと誠治は嫌がつた。それは無理もなく当初の頃はまだ軽い鍛錬内容だったのだが、誠治の身体の成長と共に厳しいものとなつていった。

朝から晩まで走らされたり熊とタイムマンをせられたり……

そうなると当然誠治は嫌になり逃げようとするのだがタダの一度も逃げ切れなかつた。

今回は特に誠治は捕まる分けにはいかなかつた。

奇跡的に京子ちゃんと香ちゃん一人と旅行に行く約束を取り付け(後一人男が一緒)れたのだ。

念密に清十郎から逃れる計画を建て全てが順調だつた。

しかし浮かれ気分で皆との待ち合わせ場所に向かつた誠治を待つていたのは満面の笑顔の清十郎。

逃げる誠治追う清十郎。

抵抗する誠治拘束する清十郎。哀れ誠治のパラダイスは無になつた。

誠治は決して弱くない。

180はある身長に引き締まつた身体。

大抵のスポーツや格闘技をこなす運動神経。

ただ相手が悪いのだ。

齡70になるが誠治は清十郎が息を切らしているのを見たことがない。

何度も組み手をしているが勝つどころかまともに攻撃が当たった事すらない。

噂だが一人でヤクザの組を壊滅したどころか外国の軍隊をも全滅したなんてのも。

ではそんな清十郎がどうして誠治を鍛えているのか？

そう問われた清十郎はただ一言、「いずれ分かる」とだけしか言わなかつた。

「何が悲しくて俺は……」

時刻は昼過ぎ。

珍しく出掛けける清十郎は誠治に蔵の掃除を言い渡した。

蔵の中は統一感のない物が所狭しと置かれている。

色彩豊かな民族衣装に妙なお面。西洋鎧があるかと思えば見たことの無い動物の剥製等々……

清十郎は若い頃世界各国放浪の旅をしていたらしく消息不明になる事は日常茶飯事だった。

「たくつ、爺いなら爺いらしく掛け軸とかにしとけよ
ぶつくさ文句を言つ誠治だが手際よく掃除をしていく。

清十郎が居ないのだから逃げれば良いと思つだらうが、そんな事をすれば後に地獄がまつてゐる。

「へタレと言ひ無かれ、誰しも死にたくないのだ。

「お兄様！」

「ん？ 飛鳥か。何だまた来たのか

誠治に声を掛けたのは山上 飛鳥。

中学3年の15歳で誠治の妹だ。

「やつと夏期講習が終わりました、これからお兄様と一緒に居れます！――」

「お前も物好きだなあ」

飛鳥は誠治が此処へ連れて来られる度に後から着いてくる。

「物好きではありません――私はお兄様と一緒に居たいんです！――」

「しかしなあ、此処にいたら折角の夏休みが満喫できないぞ？ 海とか行きたいだろ」

「そう言つと思いまして……」

飛鳥は着ていたパークーを脱ぎ捨てる。

そこにはビキニ姿の飛鳥。

「ぶつ――」

「どうですか？ 似合いますか？」

「似合つ……似合つから着ろ……」落ちていたパーカーを拾い上げ投げる。

「もっと見て欲しいんですけど」

「頼むから着てくれ……」

誠治の必死な懇願に渋々パーカーを着る飛鳥。

それにホツとする誠治。

飛鳥は美少女と言つても差し支えない容姿をしている。

街中では数え切れない程スカウトされている。

しかも15とは思えないスタイル。そこらのグラビアアイドルも裸足で逃げ出す程。

毎日クタクタになるま鍛錬をさせられている為性欲を発散出来ていない誠治には目の毒だ。

しかも最近の飛鳥はやたらと誠治にスキンシップをしてくる。

いくら美少女とは言え妹。

まさに誠治にしてみれば別の鍛錬と言える。

「お兄様、これ何でしきう?」

二人で蔵の掃除を再開して暫く飛鳥が一冊の本を見つけた。

大きさは縦50センチ横30センチ厚さ5センチ。黒い革のようない物で表装されているがタイトルも何も書かれていない。

「初めて見るな……」

十年近く前からこの蔵に出入りしている誠治だが初めて見る物だつ

た。

開いてみると本の中は白紙だった。
しかしパラパラ捲つていると1ページだけ何やら書いてある。

「異世界の行き方？」

そこには円形の図面が描かれており、図面の描き方や使う塗料等が
事細かに書かれている。

「お爺様が書いたんでしょうか？」

「多分違うだろ」

「ですよね」と飛鳥は首を傾げる。
清十郎がコレを書くのが想像出来ない。
なら何故こんな物が此処にあるのか？

「まあいいか、サッサと終わらせよう」

「そうですねお兄様」

取り敢えず掃除を再開した二人。

しかし誠治は何故かその本が気になっていた。

夜。

飛鳥は泊まる事になり一緒に夕飯を取つた。

飛鳥の料理の腕はかなりのもの。

清十郎と誠治はあまり料理が得意ではないので非常に満足した。

その後は誠治が入浴中飛鳥が間違つて？浴室に入つてくるハプーン
グはあつたものの何事もなく終わる。

二人それぞれ部屋に戻り後は寝るだけなのだが……

「何やつてんだろな俺」誠治は自分の部屋の光景を見てポツリと呟
いた。

部屋 자체は6畳程でベットと机があるだけの殺風景なもの。
しかしフローリングの床には黄色のペンキで円形の図が描かれてい
る。

ベットを縦に退かしあり直径約2メートルの円には文字らしきもの
が隙間なく書かれてある。

そうこれは昼間蔵で見つけた黒い本に描いてあつた図だつた。
本は蔵に置いてきた誠治だつたが何故か気になり夕飯後取りに戻つ
たのだ。

そしていつの間にか一心不乱に図を床に描いていた。

「2時か……」

携帯で時刻を確認した誠治は円の中心に座り暫し空を眺める。

（何でこんなもん書いたんだ俺は？）

誠治はアニメも漫画も見るがそれほど夢中に見てる分けではない。
だから異世界と言わっても正直ピンとこない。

明日は早朝から修練なので早く寝るべきなのだ。なのにこの図を描
かずにはいられなかつた。

しかも描き終わったのに何も起こる様子がない。

「寝るか……」

言ひようもない疲労感にグッタリしながら立ち上がる。

すると描いた図が淡い光を発し出す。段々光は強くなり誠治の目の前が真っ白になる。

「ちよー!? タンマーーーー！」

その頃飛鳥は気配を消しながら兄である誠治の部屋を手描いていた。

ピンクのネグリジェを着ているのだが薄く透けていて白い上下の下着が見える。

今日飛鳥はある決意を胸に此處へ来ていた。それは兄、誠治に愛の告白をする事。

兄妹の愛は禁忌タブー、許されるものではない。

しかし飛鳥に躊躇いはなかった。

幼少の頃から憧れだつた誠治。何時しかそれは好意になり愛情になつた。

とは言えその相手が兄である以上世間から祝福されるものではない。

なのだが先日15歳の誕生日を迎えた飛鳥は両親からある事実を聞く。

それは両親同士が再婚であり誠治と飛鳥は連れ子なのだと。

つまり誠治と飛鳥は血の繋がつた兄妹ではなかつた。

飛鳥はその場で号泣した。

両親はショックの為だと思ったが実はそうではなく歓喜の涙だった。叶わないと諦めていた想い、それが諦めなくて良いと解つた飛鳥は

今日身も心も誠治に捧げる決意をした。

本当なら偶然を装つて誠治の入浴中に乱入し最後まで事を成す予定だつたが逃げられたのだ。

「お兄様今度は逃がしませんよ」

子兎を狙う狼のような雰囲気を出しながら誠治の部屋のドアノブを握り一気に開ける。

「お兄様愛しています！…どうか私を抱いて下せ…」

しかし其処には誠治は居らず床に妙な図が描かれているだけだった。

「お兄様何処へ……」

それから一晩中誠治を探す飛鳥だつたが一向に見つからなかつた。

2話 いきなり見捨てられる

「マジか…………」

誠治は唖然としながら呟いた。
自分の部屋に描いた図が光り出し眩しさに目を瞑り暫くして開ける
と其処は森だつた。

見上げる程高い木々に日光は遮られ辺りは薄暗く足元は積もつた落
ち葉で柔らかい。

「まずは…………落ち着け」

一回一回と深呼吸。

「よし、現状確認といくか
まず辺りを見渡す。

森なのは解るが道場の近くではない。
自分の服装はTシャツに短パン、サンダル。ポケットにはマジック
ペンにタオルだけ。

そして足元に落ちている黒い本を拾う。

「やつぱり異世界なのか…………」

この本に書いてあつた異世界へ行く方法。

興味本位で描いてみたらこんな事になつてしまつた。

ふと、誠治は疑問に思う。

何故自分はこんな事をしたのか？

あの円形の図、魔法陣のような物を描くのに4時間以上費やした。

誠治は漫画もライトノベルも読む。だからと言つてそれほど熱心な
訳ではない。

異世界に行きたいと切に願う歳でもない。

なのに魔法陣を描いている時は止めようとは思わなかつた。

「まあそんな事考へても仕方ないか。本当に異世界とは限らないし今の段階では此処が異世界とはまだ断定出来る要素がない。ひとつとすると此処は地球の何処かでの魔法陣は何か転移装置かも知れない。

それはそれで常識外だが。

誠治は取り敢えず歩き出す。

此処が地球にしろ異世界にしろまず人と会う必要があつた。

暫く歩くと人影が見える。

後ろ姿だが女性なのは解つた。

腰まで届く赤いおさげ髪。服自体は何の変哲もない物だが何か革のような物で胸や脛辺りを覆つてゐる。背中には槍を背負い腰のベルト部分に数本のナイフを差してゐる。

「取り敢えず日本じゃなさそうだ」

あの格好は狩りをしてると推測出来るし日本ではまず捕まる。

「あのすんません」

誠治は極力声のトーンを抑え両手を上げながら声を掛ける。うつかりバッサリとやられては堪らない。

「誰！？」

返ってきた言葉は意外にも日本語だつた。
女性は素早く反転すると槍を構え誠治を睨みつける。

「迷つてしまつたんだ、近くの町か村の場所を教えてほしい」

「グルダの森で迷つた? しかもそんな格好で?」

女性は怪訝そうにする。

それも当然で誠治の格好は近所のコンビニに行く程度の軽装だ。

「途中で荷物を盗まれてね」

誠治は適当な嘘をついた。

勿論本当の事は言える筈もない。

「…………ふうん。怪しいけど悪い奴じゃなさそうね」

女性は構えを解く。

誠治を信用した訳ではないようだが争う気はない」と判断したようだ。

「彼処へ行けばルサカへ着くわ」

右側を槍で示す。

「ん、どうも」

サッサと行けと言わんばかりの態度だがそんな事を気にしてもじょうがないので誠治は歩き出す。

「待つた!!」

そんな時突然呼び止められる。

その声は切羽詰まったよう。

「何だ……」

振り向き誠治は固まる。

其処に居たは熊だった。

だが普通の熊なら誠治は何度も狩つていてるので今更驚かない。

しかし其処に居たのは全長5メートルを越え全身真っ赤な熊らしき生き物。上顎からは鋭い牙が1メートルは伸びている。

少なくとも誠治はこんな生き物を知らない。

「まさかこんな所でコイツに遭遇するなんてね」
いつの間にか女性は誠治の隣まで来ていた。

「コイツは？」

「討伐ランクBのグルベアー」

「強いのか？」

「正直一人じゃ逃げるのもキツいわね」
女性の頬を伝つて汗が落ちる。

「あなた鬪える？」

「まあそこそこ」

清十郎には未だに勝てない誠治だが彼以外なら何とかする自信はある。

しかしあれがどれほど強さか解らない為任せるとまでは言えない。

「じゃあ同時に攻撃を仕掛けて相手が怯んだ隙に逃げるわよ」

女性の提案を了承し誠治は腰を落とし構え呼吸を整える。

「解った」

「良い? 1、2、3…今…！」

合図と共にグルベアーに踏み込む誠治と踵を返し走り出す女性。

「つて何処行く…？」

「ゴメーン 一人じゃ無理だけど囮が居れば逃げれるから。じゃー
ねー」

ウインク一つし、あつと囁き聞聞なくなる女性。

「会つたばかりの相手を囮にするじゃねえーーー！」

誠治の絶叫が虚しく森中に響いた。

森の中を颯爽と駆ける女性。

「あの人には悪い事したわ」

そう言いつつ言葉に悪気が全く感じられない。

「ま、私は運が良くてあの人は運が悪かつたってだけね」
たかが運されど運。

例えどんな強力な力を持った猛者でも当たり所が悪ければ死ぬし、
病気もそう。

生き残る為に必要なのは運と言つのが女性の持論だ。

「まだまだ私はツいてるわね」
とても愉快そうに微笑んだ。

一方その頃来たくもない異世界に来て其処で初めて会った女性に囮
にされた誠治はグルベアーと対峙していた。

「おかしいな…め〇ま〇テレビだと蟹座の運勢は2位だつたんだが。
待てよ、するとアイツは蠍座か？」

そんな事を考えてながらグルベアーを観察する。

グルベアーは誠治を獲物と認識したようで涎を大量に垂らしている。

「ぬぐないぞお～」

「グルアアーー！」

突如グルベアーが誠治に襲いかかってくる。

「速い！！」

素早く左へ交わし距離を取る。

「グルル……」

グルベアーはイラついたように唸り誠治を睨みつける。

「成る程……」

誠治はグルベアーの能力の目安をつける。

知っている熊より動きは早い、大体だが1・5倍程。

「グルアアアーー！」

雄叫びを上げ再び襲いかかってくるグルベアー。

四本脚で迫り前脚を振る。

かなり余裕を持つて避けた誠治だが風圧で頬が浅く切れる。

「痛！！力も強いな」

傷から流れた血を指で拭い咳く。

誠治は何度も熊と相対してきた。

しかしこの妙な熊、グルベアーは比較にならない程強い。

「全力で行く」

誠治は呼吸を整え始める。

誠治が清十郎から教わってきた事の大半が基礎体力の向上と『氣』である。

漫画などで有名な氣だが実際にもある。とは言えそれを飛ばしたり空を飛んだり出来る訳ではない。

基礎能力の底上げが出来る程度で今の誠治では精々1・2倍向上させるので精一杯なのである。

誠治の身体が温かくなる。氣が全身を循環している証拠だ。

「よし！」「
グルベアーに向け駆け出す。

（何！？）

誠治は違和感を感じる。
異様に身体が軽いのだ。

感覚として1・2倍等ではなく軽く2倍以上ある。
しかし動きを止める訳にもいかない。

グルベアーまで一気に接近しジャンプする。狙いは眉間。
そこへ攻撃し怯ませる。

倒そうとは思っていない。逃げるまでの時間が稼げればいい。

氣を右手に集中させる。

「柔……波弾！！」

清十郎から教わった唯一の技。

『柔波弾』。

氣を用い波状の衝撃を相手に打ち込む。

外傷を与える技ではなく内、つまり内蔵にダメージを加える。

上手く行けばグルベアーは脳震とうを起こし暫くの間動けなくなる。

が、予想外の事が起る。

パーン！！

攻撃は命中したのだがグルベアーは脳震とうす所か頭部分が吹き飛んだ。

「は？」

唚然とする誠治を余所にグルベアーはユックリと倒れピックリともしない。

（氣の威力が段違いに高い…………）

誠治は自分のした事に戸惑つ。

こんな事は清十郎なら出来るかも知れないが誠治にはまだ無理な事。

「異世界…………だからか？」

それぐらいしか理由が思い浮かばない。

「まあ、今は」

誠治は頭の無いグルベアーに手を合わせる。

「済まんな」

運の無いグルベアーに誠治は謝った。

4話 女性に歳を聞くのは禁句です

「見えた」

ようやく森を抜けるとそれを確認出来た。

5メートルはある石材の壁。

近づくと入り口の門が見える。

恐らく彼処があの女性が言っていたルサカだろう。

中に入りたかつたが誠治は自分の姿を改めて見る。

グルベアーレとの鬭いのせいで服は汚れ所々破けている。右手に黒い本、左手にグルベアーレの牙一本。

此処が異世界だと確信した誠治はまず金の心配をした。

元の世界に戻るにしても直ぐには無理だらう、なら生き延びる為には金が必須。

あの女性がグルベアーレの事を討伐ランクBと言っていたのを思い出したのだ。

某狩猟ゲームや異世界系小説にはギルドと呼ばれる組織が描かれている。そのギルドで討伐した動物の採取部位を売る事が出来ていた。

ならこのグルベアーレの牙も売れるのではないかと判断したのだ。

が、いくら何でもこの格好は怪しそう。

門の両横には門兵らしき人がいる。

誠治自身が門兵でも今の自分ではまず街の中には入れないし通行料がいるかも知れない。

「う～む……」

「何してるの？」

「うわあっとーー？」

さてどうするかと誠治が考えていると不意に背後から掛けられた声に飛び退く。

其処に居たのは女性、いや少女か。

黒髪を肩の辺りで切りそろえている。あどけない顔立ちは可愛らしく中学生位に見える。服装はフード付きの白いローブ。誠治の頭には某有名RPGの白魔導師思い浮かんだ。

「大袈裟じやない？」

少女は呆れたように肩を竦めた。

「それに随分な格好ね、何があつたの？」

「えーと、田舎から出て來たんですけど荷物を盗まれましてどうしようかと悩んでいて」

言葉の内容 자체はおかしくないが明らかに動搖してしまっていた。これは疑われる相手の様子を伺うと、少女はガシッと誠治の両手を握り締める。

「大変だつたね…」

「へ？」

「大丈夫よーー何があつたかなんてもう聞かないから……頑張つて生きて行けば絶対良い事あるからーーー」

少女は目を潤ませながら力説する。

「どうやら少女の中で誠治は故郷を何らかの事情で追い出された可哀想な身の上になっているようだ。

「どう、どうも…」

誠治は否定するのも何だし、少女の迫力に押され頷くしかなかつた。

（しかし何処の世界も良い奴と悪い奴もいるもんだ…）

この世界に来ていきなり囮にされたと思ひきやこうして身も知らない男に心底同情している少女を見ると、どっちの世界もあまり変わらないと誠治は少し安心した。

「ありがとうな、えつと名前は？」

「あつ！？自己紹介もしてないのにゴメンね。私はルケア」「ルケアは一ツひとつと微笑み名前を言った。

「俺は山上 誠治。セイジだ、よろしく」

「うん！よろしくセイジ」

二人は笑い合うと握手をする。誠治の方が背が高い為屈んでだが。

「で、ルケアの保護者は何処だ？」

誠治は周りを見渡す。

ルケアのような少女が一人で居るにはこの森は危険だ。
なら保護者が居る筈だと探すのだがそれしき者は見当たらない。

「私一人ですけど？」

「えー？ダメじゃないか一人なんて危ない！！」

何せさつきのグルベアーがいるような森だ誠治は大丈夫だったがこの少女が一人でどうか出来るとはとても思えない。

「…………私幾つに見えますか？」

若干ルケアの声が震えている。

「そうだな…………14、5歳かな？」

「…………24です」

「…………はい？」

「だから私は24歳なんです」

誠治は頭を傾げるが直ぐにうんうん頷きルケアの頭をポンポンと叩く。

「またまた～、どう見ても14、5歳だぞ？本当は幾つなんだ？ひよつとしたら10歳とかか？まあ幼く見られたくないってのは解るがな」

「…………」

ルケアは無言のまま誠治から離れ背負っていたバッグから『』を取り出し構える。

「あの……ルケアさん？」

言ことのない殺気に誠治の背中に冷たい汗が流れる。

「私は歳の事でからかわれるのが一番許せないんです……」

「ちょ！タンマ！？」

それから暫くの間誠治は降り注ぐ矢を死に物狂いに避け続けた。

「ニニガルカサカ」

誠治は目の前に広がる風景に感嘆とする。

石畳の道には馬車が通り、煉瓦造りの家々が連なる。通行人の髪は黒、赤、蒼、緑と鮮やかで耳が尖つていたり羽が生えていたりと明らかに人間でないのも居る。

異世界。まさにその一言に尽きる。

「で、何時までむくれてるんです?」

「…………いいんです、どうせ私は見た目も中身も子供ですよー」
隣を歩くのはルケア。

ルケアの放つた矢の雨を何とか避けきつた誠治はルケアに謝り許して貰つた。

ルサカの街に入る時に案の定門兵に変な目で見られた誠治だつたがルケアがその門兵と知り合いだつたらしく何事もなく済んだ。なのだがまだルケアの機嫌は直つておらず頬を膨らませて黙つている。その姿が余計に子供っぽく見えるのだが勿論そんな事言えない。

「機嫌直してよルケア姉さん」

「え?」

「あ、いや俺より年上だから…」

軽率だつたかと誠治は思ったがルケアは先程までの不機嫌顔から一転して笑顔になる。

「うふふ…姉さんか。そうよ私はお姉さんよーとあ弟よ行くわよー。」

と、駆け足で先に行ってしまう。
その姿がまた子供っぽいのだが。

二人はある建物の前に居た。

誠治はルケアにグルベアの牙を売る場所はあるかと尋ねるとやはりと言うかギルドはあり、其処で売ればいいという話になつた。
そこで二人はギルドまで来ていた。

赤い煉瓦造りで三階建て。

ルケアによれば一階は仕事の依頼関係全般で二階はギルドへの登録や解除などの事務中心、三階は解らず関係者以外立ち入り禁止なのだそうだ。

グルベアの牙を卖るのは一階だが、先にギルドに登録してからの方が高く買い取ってくれるそうなので二人は二階に上がつた。
人でじつた返し騒がしかつた一階に比べ二階は話し声がするだけで元の世界の役所を思い出させた。

「登録お願い出来ます?」

ルケアは受付らしき場所に座つている女性に話しかける。

「はい、あらルケア?」眼鏡を掛けた女性がルケアを見て少し驚いている。

「どうして冒険者止めるの？」

「や・め・な・い。くだらない事言つてないで」の子の登録をお願い

ルケアに促され誠治は前に出る。

「へえ、やつと男が出来たのね」

「...めざい」

そう言われた川ヶ原は顔を真っ赤にして机に鼻を乗り出す。

照れなくていいのよ お姉さん安心したわ」

あなた年下でしょ!!か!!」

「待たせてご免なさいね、手続きしましょうか」

喚くルケアを余所に数枚の紙を取り出し机の上に広げる。

ナナあなたね！？」

「はいはい何時まで取り乱してんの。からかつただけよ」

」」」

「子供じやないつてんなら年相応に落ち着いたら?」

「ふんだー！ セイジ終わつたら一階に来なさいよーーー！」

ルケアは言い返せないのかドスドス歩きながら下へ降りて行つた。

「で、あなた本当にルケアのいい人じゃないの？」

「違いますよ、今日会つたばかりですし」

「残念。男でも居ればあの子少しさは大人っぽくなるだひつはどね」

「ルケア……さんと知り合いなんですか？」

「ええ、幼なじみよ。ちなみに私の方が一つ年下」と、軽くウインクする。

セイジも思わずドキッとするぐいりこ色つめさ。

（まあルケアも怒りたくなるわな）

ルケアに同情する誠治だった。

「では改めて、私はギルド職員ナナ・クレパス。よつこそ我がギルドへ」
さつきまでのいたずらっ子のような顔つきとは打って変わりキリッとした表情は有能なキャリアウーマンのようだ。

「「」用件は登録でよろしいですか？」

「は、はい」

「ではこれから記入お願いします。名前以外は書いても書かなくてよろしいので」

妙に迫力のあるナナに、悪いながら差し出された紙を見る。

「あれ？」

「どうかなさいましたか？」

「あー…何でもありません」

そう言うものの誠治はその紙に書かれている文字に驚いていた。
そこに書かれている文字は日本語だった。

何故?と誠治は混乱していた。

言葉通じるのは百歩譲つてまだいい。しかし文字まで日本語なのは
流石に違和感しかない。

だからと言ってナナに何でこの文字なのかと聞く事は出来ない。
誠治は自分が異世界から来たのを出きるだけ隠しておきたかった。
頭がおかしいと言われるだけならまだいい。

この世界の常識や宗教がどうなっているか、解らないが下手をすれば
異端とされ捕まり処刑されないとも言えない。
つまり現状では何も出来ないという事。

紙には書く欄が幾つかあつたが名前だけ書く事にした。

何か言われるかと気が気でない誠治だったがナナは受け取った紙を
見ても特にリアクションはしなかつた。恐らく何かしらの事情で書
けない人達がいるのだろうと判断し安堵した。

「ではこのギルドの説明をさせて頂きます。まずランクがあり上からS、S、A、B、C、D、Eの7段階あり受けれる待遇に違い
があり上のランクの依頼ほど高い報酬を得られます。尚、請けれる
依頼は同ランクの物か下のランクのみとなります。ある程度数の依
頼を達成されますとランク昇級試験が請けれます」

ナナは銀色の受け皿を取り出し、その上に指輪を置く。

「これがギルドに登録した証です。依頼を請ける時や達成の報告、素材の売却時には提示して下さい」

誠治はその指輪を取り観察する。

何かの金属製で色は黒。これと言つた特色はない。

「今セイジ様はランクEなので色は黒ですが、ランクが上がる度に色が変わつてこきます。後何かご質問は？」

「そうですね…無くすとどうなります？」

「紛失の場合は30万キュエルで新しい物をご用意します」

「なるほど」

と、言いつつ30万キュエルがどれほどの価値か分からぬ。(まあそれはこれから知つてくしかないか)

「ありがとうございました」

誠治は指輪をポケットに突っ込むと立ち上がる。

「あ、それからこれは個人的なお願いなんだけれど…」

「はい？」

「ルケアをお願い、あの子危なつかしくて」

「出来る事はしますよ」

ナナの心配顔に誠治は微笑んで答えた。

一階でルケアと合流した誠治はグルベアーの牙を売却した。値段は一本で150万キュエル。本来なら200万キュエルしてもいいのだが、ヒビが数ヶ所あるためにこの値段になった。

「いい無くしちゃ駄目よ？」

「分かつてるつて」
さつきからのルケアに誠治は苦笑いしている。
やはり150万キュエルは大金らしくルケアが心配しているのだ。
渡されたのは計6枚の硬貨。
500円玉程の大きさで銀色の円形硬貨が5枚。それより倍程の大きさで薄い金色の五角形硬貨が一枚。どうやら円形硬貨が一枚10万キュエルで五角形硬貨が一枚100万キュエルのようで紙幣はないようだ。

「私は用事があるから一緒にに行けないけど大丈夫？」

「何とかなるよ
これから誠治はこのお金で冒険者の装備を整えるべく買い物に行くのだがルケアはどうしても外せない用事があるようだ。

「いい? 終わったら私の所に来るのよ

「分かつたつて」

「絶対よ！絶対来なさいよ！」

ルケアは何度も振り返りながら走つていった

「やれやれ…」

そんなルケアを眺めながら誠治は溜め息を吐く。
この世界に来てまだ1日と経つていないので色々な事があった。
勿論元の世界に帰るのが目的だが直ぐには無理。ならそれまでこの
世界で生きて行かなくてはならない、もしかすると一生。

「まあ今はまだいいか…」

誠治は自分に言い聞かせるように呟く。

先の事は誰にも解らない。なら今を生きるしかないのだ。

「さてと」

誠治は街中へ歩き出した。

買い物を終えた誠治はルケアの居る宿屋に来ていた。誠治の姿はすっかり変わっていた。

グレーの長袖長ズボンに革のブーツ、脛当て、胸当て。拳部分に金属が付いている籠手。テント生地のようなもので出来たリュックを背負い中にはこの世界に来ることの切欠になつた黒い本とマジックペンを入れている。そして、ギルドの指輪は紐を通し首から下げている。

総額52万キュエル。その内防具一式が50万キュエルになる。少々高いかと思つた誠治だつたが、冒険者と言つ命懸けの仕事をする以上装備をケチりたくはなかつたのだ。

そんな事で今の姿形だけで言えば冒険者として違和感はなかつた。

開けっ放しになつてゐる入り口から中を覗き見る。

ルケアからは宿屋と聞いていたがテーブル席が幾つかありカウンターの棚には酒瓶が並んでゐる。どうやら一階は酒場になつてゐるようだ。

「それってクビって事！？」

店内中に響く大声に誠治はその方向を見やる。

其処には男女一組がテーブルに付いておりその中にルケアがいた。ルケアは怒りの表情で立ち上がりテーブルをバンバン叩いていた。

「そう取つて貰つても構わない。悪いがこれ以上君とパーティーは組めないと皆が言つてゐるのでね」

そんなルケアに冷ややかに言い放つ男。

4、50歳位で瘦せているが眼光鋭い。例えれば鷹のよう。

「だからって……あつーー？」

その時ルケアと田代が合つ。

何故か誠治は不味いと思い逃げようとするが素早くルケアに腕を掴まれてしまう。

「セイジちょっと来てーー！」

グイグイと引つ張られ隣に座らされる。

「えっと、ルケア姉さん俺にじぶんじぶんと？」

「弁護して」

「んな無茶な…」

(今日会った人の何を弁護しようと?)

「この方は？」

セイジがぽんやりとそんな事を考えていると男が話しかけてくる。

「え、セイジです。ルケアとは今日会つたばかりの知り合いです」

「ひょっとして冒険者ですか？」

「ええ、なりたてですが」

「そうですか。私は冒険者グループ『銀龍』の代表ガルド・ファーレンと申します」

「セイジ・ヤマガミです。で、冒険者グループと申つのはなぜ?」

「冒険者グループと申つのはギルドに登録している冒険者らがお互

いを協力しあう集まりです「

ガルドはコップの水を一口飲む。

「依頼は様々な種類があり、またそれに対応する能力が必要になります。討伐系には戦闘力、採取系には知識等。しかし個人のパートナーは5人までと規定があるのでそれも限界があります。しかし冒険者グループに入つていれば依頼毎に必要な能力を持った冒険者達を派遣しより確実に依頼を完遂出来ます」

「へえ～」

人材派遣会社みたいなものかと誠治は解釈する。

『銀龍』のようなグループは幾つもあり冒険者の殆どが入つていて必要不可欠な物。

「セイジさん、よろしければ『銀龍』に入りませんか?」

「お金は要ります?」

「ええ、最初に1万キュエルで依頼達成時に報酬から20%頂きます」

高いとも思えるが負担は減るしその分多く依頼を請けれる。その事を考えれば悪くない。

「ちょっと何勝手に勧誘してるのよ…」

そんな考えをルケアの声が寸断する。

「私達は常に有能な冒険者を探してますから」

「セイジは冒険者になつたばかりって言つてたでしょ…」

「落ち着いてルケア姉さん。それでガルドさん、さつきルケア姉さんがクビがどうやら言つてましたか何かあつたんですか？」
「このままでは話が全く進まないと判断しルケアを落ち着かせガルドに話を振る。

「ルケア様は『銀龍』に所属して居られるのですが他の冒険者方からのがく情が絶えないので。例えば……」

ガルドは懐から紙を取り出す。

「『後方援護の』で殺されそうになつた』、『採取の際目的の物をずっと足で踏みつけていた』、『容姿の事を言われ暴れる』、『保存食を腐らす』等々……」

「ルケア姉さん全部本当の事？」

「…………てへ」

「敗訴です」

「そんなんあつさりー？」

「だつて不味いだろこれ……」

冒険者は死と隣り合わせの危険な仕事で一つのミスが死へと繋がってしまう。

正直誠治でもルケアと組みたくない。

「我々も余り冒険者同士のいざこざに関わらないのですが流石にこの様な事が頻繁に起きては信用に關わるので」
ガルドも疲れたように言つ。

「もついいわよ……そんなんに辞めさせたいなら辞めてやるわよ……」
そつ言い放ち誠治の肩に手を置く。

「セイジとパーティー組むから……」

「…………はい？」

「了承して頂いて有難う御座います。ではこれで」

「ちょい待てよアンタ！？何ホツとして立ち去るのとしてんだよ……？」

事の重大さに気付いた誠治がそそくわと居なくなつとするガルドを呼び止める。

「セイジさん冒険者は生き残る事が第一です。生き残つて下さー」
振り向き憐れみの籠もつた目を言い、居なくなつた。

「セイジ……今日からが私達新生パーティーの始まりよ……」

「…………寝たい」

目を輝かせ宣言するルケアを余所に誠治は心身の共にグッタリとしていた。

閑話 兄を訪ねて…

誠治が深い眠りに着いた頃。

日本は夏の猛暑が悪あがきの如く猛威を振るつていた。

「此處にも居ない……」

此處海水浴を茫然と眺める一人の美少女、山上 飛鳥である。

異世界に行つてしまつた誠治だがその事を知る由もない飛鳥は彼方此方を探していた。

海水浴場に来たのには理由があった。

この夏、清十郎に連れ去られるまで誠治は大学の友人達と海に旅行する予定であった。

飛鳥はその事を誠治から聞いていた、と言つよりその情報を清十郎へ流したのは飛鳥である。

誠治は清十郎には旅行を隠していたが飛鳥には普通に話していた。まさか妹から清十郎に情報が流れるとは思わなかつたのだ。飛鳥にしてみれば愛しき兄が他の女と旅行に行くなど許容出来るはずがなかつた。

そんなわけでまだ誠治が居なくなつて1日と経つて居ないため当初予定していた旅行先は流石に無いと判断し、ならばと海に来ていた。だが当然の如く誠治の姿は見えない。

「はあ…」

溜め息を吐き落胆する姿に見とれる男二人組。

「良いなあの子、壇掛けよ! ひざ」

「止めとけよ」

「んだよ!」

「あの子の後ろ見て見ろよ」

「後ろ?……げつ!?」思わず青ざめる。

飛鳥の後ろには哀れなナンパ男の骸が山積みになつてゐる。
死体ではありません。

「何だあつや!?」

「あの子がやつたんだよ」

幼い頃から誠治に付いて回つていた飛鳥も清十郎に鍛えられて來た。

何でもこなす飛鳥だが、武術に関しては天才だつた。
14歳の頃に清十郎からお墨付きを貰つた程である。（因みに誠治
はまだ）

飛鳥を本氣でどうにかしたければ5人以上の達人クラスを用意しな
くてはならない。少なくとも軽薄ナンパ野郎がダース単位居ても何
の役にもたたない。

「今度はお兄様がよく卑猥なDVDを買つてお店を探しますか……」

飛鳥放浪の旅はこの後二週間続いた。

翌朝。

朝の日差しに起された誠治。

頭はボーとし体は怠い。

昨日は濃すぎる一日だったせいがまだ心身共に回復していない。

「起きるか…」

本当ならこのまま惰眠を貪つていていたい誠治だがそんな暇はない。まだ100万キュール弱のお金のあるつむに冒険者の仕事に慣れなくてはならない。

何せどの位か解らないがこの世界で生きていかなければならぬか

ら。

宿になつてゐる一階から一階に降りルケアと会流。

朝食を食べながら今后の事を話しながら。

「まず、ギルドに行つて…あ、落ちた」

床に落ちたパンをサッと拾い上げ口に放り込む。

「……」

「そんで簡単な依頼を請けて…あ…スープが袖に付いてる…？」

「…」

ビシャビシャになつた袖をギュッと絞り布で拭くルケア。

「……」

そんな騒がしいルケアを見ていて誠治は一つ解った事がある。

ルケアは雑なのだ。

食べ物をポロポロと落とすはコップは倒すわでテーブル上は酷い有り様になっている。

雑であり不注意な性格。

その性格が冒険者グループ『銀龍』をクビになつた根本の理由なのだろう。

流れとは言えパーティを組んだ以上ルケアを見捨てる気はない誠治だが何とかその性格を直すようにこれから言つて行くつもりだ。

「ねえ聞いて……あつ」

ルケアの手からフォークがすっぽ抜け誠治の頬を掠める。

「ゴメンね~」

「ははは……」

そう、何とかしなければ自分の命が危ないのだから。

「やつほーーー！ナナ」

「そんな大声上げなくても聞こえるわよ」

朝食を終えた二人は早速ギルドに来ていた。

昨日喧嘩して別れたルケアとナナだが今は普通に話している。幼なじみの二人にしてみればあんなのは日常茶飯事であった。

「どうしたの？ やけにテンション高いわね」

「私、セイジと組んだの！！」

「セイジ君とパーティー組むの？」

「ええ、セイジは初心者だからね。お姉さんが面倒見てあげないと胸（無い）を張り堂々と言い放つルケア。ナナはセイジを手招きし声を潜める。

（お願いはしたけどパーティーを組む必要は無いのよ？）

（俺もそのつもりはなかつたんですが流れで…）

「ルケア、セイジ君に迷惑掛けちゃ駄目よ？」

「そんな事しないわよ」

何言つてんの？と言わんばかりのルケアにナナはこれ以上の事は言わない事にした。

機嫌を損なうと面倒なのは解っているからだ。

「わうわうセイジ君魔法球渡すの忘れてたわ」
そう言つてテニスボール程のガラス玉のような物を3つ取り出す。

「何ですか？」

セイジはそれを手に取る。

よく見るとHIEの中心が白く光っている。

「知らないのセイジ？じゃあ私が…………」

「ルケア、それ私の仕事だから」

「あはは、ついね」

「全く…………で、これは魔法球と言つて魔法が入っている物なの」

「魔法！？魔法があるんですか！？」

「どうしたのそんなに驚いて？」

「セイジ？」

セイジの驚きよつにナナとルケアがポカンとする。

（しまつた！？）

セイジは自分の失態に動搖する。

余計な厄介事を避ける為には異世界から来た事は絶対隠さなければならぬ。

魔法があると言つのはこの世界では常識なのだ。

その常識で驚くのは明らかにおかしい。

「あつと…自分の故郷はかなりの田舎でして」

「せつ…まあ中々魔法を使える人は少ないから知らないのも無理な
いかもね」

「しょうがないわね。じゃあやつぱり私が説明…」

「私がするからルケア」

「そう?」

事なきを得て誠治はホッとする。
ナナとルケアを信用しない訳ではないがどこから話が漏れるか解らない為用心するに越したことはない。

「魔法を行使するには魔力が必要で魔力は多かれ少なかれ誰でも持つてゐる。でも魔力を火とか水とかの魔法として具現化出来る人は少ないので。魔法は便利で冒険者にとつては必要不可欠でも使える人は少ないので。なら誰にでも使える道具があればいいと言つて出来たのがこの魔法球なの」

「この中に魔法が…」

「そう、但し一回だけの使い切り。空になつた魔法球は透明になるからギルドに持つてくれれば魔法を充填できるわ」

「お金はどの位で?」

「これが一覧よ」

ナナから紙を受け取り見る。

『回復(小)	2000キュエル
回復(中)	4000キュエル
回復(大)	6000キュエル
解毒(弱)	2000キュエル
解毒(強)	5000キュエル
鎮痛(弱)	1000キュエル

鎮痛（強）4000キュエル
治癒50万キュエル
開錠10000キュエル
火球（小）2万キュエル
火球（中）5万キュエル
火球（大）10万キュエル
水球（小）5000キュエル
水球（中）5万キュエル
水球（大）10万キュエル

「治癒が抜けた高いですね」

「治癒は大抵の病気や怪我なら直ぐに治るから。回復は疲労を回復するだけだからこの値段。水球（小）は攻撃用じゃなくて飲み水用、大樽一個分の水が出るわ」

「なるほど」

「覚えていて欲しいのは開錠を犯罪に使つたらこれだから」と、ナナは首をトントンと叩く。

「勿論しません」

何事もないように言うナナに誠治は背筋を正す。

魔法球は強力で便利なだけに犯罪での使用には罰則がかなり厳しい。逃げてもギルドが高額の懸賞金を掛けるので大概捕まる。ギルドの信用問題にも関わるからだ。

「（）の一覧以外の魔法もあるからその時は直接聞いてね

「はい。でもそんな物を貰つても良いんですか？」

「それは支給品。中は回復（小）が2つと解毒（弱）が1つ。3つ以上欲しかったら販売もしてるわ」

「因みに1ついくらですか？」

「100万だけど誰にもつて訳じやなくてギルドが了承しないと売らないの」強力だけにお金だけで大量に所持されては困るからだ。

「そう言えばルケア姉さんは魔法球に何を入れてるの？」

「回復（小）回復（中）火球（中）ね」

「へえ…火球（中）を持つてるんだ？」

「これで魔物一掃したら気持ち良さそうだから」

「へ、へえ…」

赤い光を灯す魔法球を持ちブンブンと腕を振るルケアを見て顔をひきつりせる誠治だった。

「グルダの森。

誠治とルケアはギルドで依頼を1つ請けた。

『バルバル草5束採取。

報酬2000キユエル。

受諾可能ランクE。』

バルバル草は胃薬に使われる薬草。

森の中まで行かなくても採取出来るのでランクは一番下。受諾可能ランクは1人ならそのまでパーティーの場合は過半数を締めるランクになる。

例えば5人の場合Bランク3人にCクラス2人ならBランクに。Aランク2人、Bランク2人、Dランク1人ならAランクとBランクが同数の場合低い方のBランクになる。

誠治はEランクでルケアはDランク。その為Eランクの依頼しか請けれない。

「どう、あつた?」

「これ?」

「うんそれ

最低ランクの依頼だけに1時間も経たない内に5束を集め終わる。

懸念していたルケアの失敗は無く誠治は安心した所で思い出す。

「そう言えば魔法球つてどう使うの?」

使い方を聞き忘れていたのを忘れていた誠治。

「ああそれはね…」

ルケアは魔法球を1つ出し手に持つ。

「使用するつて意志を持つてキーワードを言つ。それが引き金に
なるから」

「何でも良いの？」

「ええ、私は単純に『開け』って…」

その途端ルケアが持つ魔法球が赤く光り出す。
そしてバスケットボール大の火球が出現し誠治に向かって飛ぶ。

「うわあああーーー！」

「…………あれ？」

悲鳴を上げ逃げ惑う誠治。

「解散します」

「お願い見捨てないでーーー！」

暫くの間ルカサの街で包帯姿の男にすがりつく少女の姿が見られた。

8話 ランク昇級試験

誠治が冒険者になり一週間が経つた。

初日こそ酷い目にあつた誠治だったが順調に依頼をこなして行つた。

ルケアは最初の失敗をかなり反省したらしく以後大した失敗はしなくなつていた。

そんなある日、誠治とルケアはギルドでナナと話していた。

「ランク昇級試験？」

「ええ、そろそろ請けてみたら？」

ナナからの提案に誠治は首を傾げる。

「早くないですか？」

「そんな事無いわ」

もつと上のランクなら話は別だが現在誠治のランクは最低ランクのE。余程実力が共合わない以外一週間は決して短くない。

「解りました。で、内容は？」

「ランバード三匹の討伐、但し肉は傷つけないのが条件」

ランバードはグルダの森に生息する鳥型の魔物。鷹や鷲に似ており性格は温厚だが畑などの作物を食い荒らすので嫌われている。ただ肉は美味でルカサでは少し高級な料理に良く使われる。

「後、必ず一人でやる事。あなたの試験だから」

「そう言つうナナだがEからDの昇級試験程度で手伝いがあつてもさほど言われる事は無い。上のランクだと失格になる場合もあるが。

「そう言えればルケア姉さんの時は上手くいった?」

「そ、そりやあ勿論」

「かなり手間取つたわよ」

「ちょっとナナ!?」

「ルケアの」の腕はそこそこなんだけど見付けるまでが大変でね、
「今日も居なかつたあ~」つてよく私に泣きついてたわ

「もうお止めてよ!」

顔を真っ赤にして飛びかかるうとするルケアに身長差を生かし軽く
あしりうナナ。

「期限はあるんですか?」

「3日目」

「うん、なら大丈夫だ」

「……」

自信あり気な誠治に無言で睨むルケア。

「ね、姉さん?」

「簡単そうな依頼でも甘く見ちゃだめよーーー。」

「自分は期限ギリギリだつたから拗ねてるのよ」

「ちがーうー！」

グルダの森。

誠治はジツと息を潜め獲物を見据えている。

一步一歩とジコジコと近づく。

「クワア！！」

異変に気づいたランバードが飛び立とうと翼を広げる。

ガシツ。

それを許さず誠治は両手で捕まえ首を捻る。

ランバードは断末魔を上げる隙も無く息絶える。

誠治はナイフで首を切り落とし逆をにして血抜きをする。

ランバードを捕まるには大まかに2つ手段がある。一つは弓や魔法球等で撃ち落とす。

それらの手段が無い場合は地上に降りた時を見計らい捕まえる。ランバードの好物は鼠でそれを捕食する時に地上へ降りてくる。ただ気配に敏感な為素手で捕まえるのは難しく大抵は罠を張るか網でとなる。

しかし誠治は森に入り三時間余りで既に一匹のランバードを捕らえていた。

誠治は気配を消す修行の一貫でよく雀や燕を捕まえさせられていた。雀等を素手で捕らえるのは想像以上に難しく、少しでも気配を悟られるとまず無理なのだ。

それを誠治は11歳の頃からやりされ、完璧に出来るよくなれたのは16歳だった。

今の誠治なら容易い事と言えた。

「居た……」

運良く五メートル先で鼠を捕食しているランバードを見付ける。同じ要領で近付きあつさつと捕らえる事に成功する。

「一」いや夕飯にはまだ早いな

日はまだ高い。時計は無いが感覚的に3時頃だらうと誠治は推測する。

「ルケア姉さん驚くかな?」

出発前の時を思い出す。

付いて行くと言い張るルケアに困り誠治は帰つたら豪華な食事を奢るからと説得した。『ねる子供は食べ物で釣るのが一番……そんな事はとても本人の前では言えないが。

「ぐはあ……」

突然背中に衝撃を受け吹き飛ばされる誠治。

肺の中の空気を吐き出された息苦しさを感じながら背後を見る。其處にいたのは鹿に似た生き物だった。

ただ大きさは誠治の知っている鹿より一回り大きく全身黒、角は絡

み合ひつようになつておつ一つの塊になつてゐる。

ブラックティア。

グルダの森に生息する凶暴な鹿。

ブラックティアは田を真つ赤にし止めと言わんばかりに迫つてくる。

（ルケア姉にああ言われたのにな

それは油断だつた。

誠治は忘れていたのだ冒険者が死と隣り合わせの職業といつのを。

（爺いに知れたらえらい事だな）

何故か今そんな事を考えてしまつ。

清十郎の修行は厳しかつたが特に急けや油断などじょりものならそれこそ死にそうな稽古をさせられていた。

（ああ…だからか…）

誠治は変に納得してしまつ。

死なないために死にそつなる位修行をさせられたのかと。

ヒュンヒュン。

風を斬る音がしたと思いきやブラックティアの顔に矢が突き刺さり突進が止まる。

「え？」

「セイジーーー！」

自分の名を呼ぶ声がする方を見ると其処には弓を構えているルケアの姿があつた。

「グルラア！！」

ブラックディアが再び誠治に突進して来る。顔に矢は刺さっているが浅かつた為一時止まつただけだった。

しかし誠治にはその僅かな時間だけで充分だった。

呼吸を整え氣を全身に巡らせる。

ブラックディアが動く前に側まで移動し胴体に蹴りを入れる。

ズガアーン！！

ブラックディアは何本もの木をなぎ倒し吹き飛ばされ岩に激突すると動かなくなる。

「あたた…」

誠治は上体を軽く動かし怪我の状態を確かめる。多少痛むが骨折や内臓に異常はなかった。

「大丈夫！？と言うより強いのねセイジ…」

実は誠治が戦う所を初めて見るルケア。

ブラックディアは討伐ランクC。此処グルダの森でグルベアーリと双璧を成す強力な魔物、それを一撃で倒した誠治にルケアは驚いていた。

「いや…ルケア姉さんのお蔭だよ」

謙遜ではなく本音だつた。

あの時ルケアが弓でブラックディアを攻撃しなかつたら、死にはしなかつただろうが恐らく大怪我をしていた。

「へへへ、まあパーティーだからね」

「でも来ちゃったんだ？」

「う、あの……やっぱり心配で……」

俯き、手を「一々」、「一々」と二ねぐら回す姿に誠治は笑い出す。

「笑わなくたつていいじゃない……」

「「あぐ」あぐ、ああ帰らうか」

「うん、もうしょー」

いつもして2人はルサカの街に帰つて行つた。

セイジ・ヤマガ!!。
ランク昇級試験合格。
Dランクに昇格。

9話 運がある者ない者

誠治がDランクに昇格し3日。

EランクとDランクからの違いは主に依頼の内容だ。

Eランクの依頼は採取と雑務のみでまずは依頼に慣れて貰う事から始まる。Dランクからは討伐系の依頼が出始め、危険度がぐっと上がる。

つまりDランクから本格的な冒険者と言えるのだ。

……なのだが。

「この依頼を頼みたいの」「ギルドへ来ていた誠治とルケアを呼び止めたナナは一枚の依頼書を渡してきた。

『五連草12束の採取。但し同じ根から4束づつ採取する事。
報酬10万キュエル。
受諾可能ランクD。』

「これですか?」

「ええ、どうかしら

誠治は依頼書を確かめる。

採取系にしては報酬が高額だ。勿論採取系でも高額の依頼はあるが、

それはもつと上のランクになる。

Dランクの採取系だと大体1万キュエル前後が殆ど。

10万キュエルは破格とも言える。

「何でこんなに報酬が高いんです？」

誠治は素直に聞いてみる。

依頼を請けて手に余るようでは困るからだ。

「『』の五連草が少し厄介でね」

この五連草は人参の葉に似ており滋養強壮薬の材料として用いられている。

その名の通り一つの根に五つ生えている。

「でも問題が採取時でね。五つの内一つだけの外れを引くと残りが枯れてしまうの」

外れを引くと残りは全て枯れる。最小で一束、最大で四束採取出来るので。

つまりこの依頼は外れを一度も引くなと『言つ』こと。

「何か見分ける方法はあるんですか？」

「外見では無理。一応『解析』の魔法球なら見分けられるけど、一回使つたら終わりだし50万キュエルするから割りに合わないの」

「何でギャンブル性の高い草なんだ…」

「でもこれはセイジ君じゃなくてルケアに頼みたいの」

「ルケア姉さんに」

「『』の子供さは強いのよ」

「まあね、お金の無い時はよくこれで稼いだから」

「え~と俺は?」

そう誠治が言うとナナとルケアは顔を見合わせる。

「セイジ君はねえ…」

「運が無いから…」

「うつー?…」

二人に言われ言葉に詰まる誠治。

確かに誠治は運が無いと言える。

分かり易いのはくじ運。宝くじや賭け事、福引き。これらの物に当たつた事が一度もない。

この世界に来ても運の無さは変わらない。

誠治が果物を買いつと甘くなく、飲み物を買いつと並ぶと寸前で売り切れ。

そんな所を何度もナナとルケアに叩撃されそう判断されたのだった。

思えばこの世界に来て早々見知らぬ女性に殴にされ、油断したとは言えブラックディアに突き飛ばされ、そもそも望んでもいないのに異世界に来てしまっている現状。

しかし、

「俺がやる」

はいそうですかと引き下がる程誠治はオトナではなかつた。

グルダの森に入り川辺の口陰を探す。

「あれよ

ルケアが見つけ誠治が合流する。

全く同じ草が五つ直線に並んでいる。

「姉さん俺がやるから、いいね？」

「ま、まあ頑張って」

誠治の意気込みに若干引き気味のルケア。

「あつと血の間に終わらせるよ、くつくつくつ……」

誠治は危機迫る形相で五連草と対峙する。
確かに全く一緒に区別がつかない。

（こんな時は感性に任せると……）

ジックリと五連草を見据える。

視覚ではなく感覚で見極めようと氣を巡らせる。

「これだ！！」

その中の一本を掴み勢いよく引き抜く。

（手応えあり……）

確信を持つ誠治だったのだが……

ものの見事に残りの四本は枯れてしまつた。

「ええ……」

「あ～あ
ショックに固まる誠治と予想出来てたのかリアクションの少ないル
ケア。

「今のは偶々だ！！次だ次！！」

それから計四回挑戦して全て一回目で外れを引いた誠治。

「こんな…………こんな筈じゃ…………」
すっかり意氣消沈し体育座りでいじける誠治。

「気が済んだ？じゃあパツパツと済ますわよ」

やれやれと言つた感じでルケアは五連草を探し見つける。

「じゃ抜くわよ」

さして考えず五本の内の一本を抜く。
残りの四本は枯れずそのまま残る。

「ホイホイホイ」と

残り三本をアツサリ抜く。

一本も枯れず四本の採取に成功する。

「そんな簡単に…………」

何の氣負いもなくスンナリやつてのけたルケアに唖然としうなだれ

る誠治だった。

残りもルケアが簡単に済ませ二人は帰路についていた。

「ルケア姉さんは運が強いの？」

何とか立ち直つた誠治がルケアに聞いてみる。

「うーん…… そうね、実感は無いけど良い方だと思うよ？今まで仕事で怪我した事ないし」

「………… それって周りの運を吸い取つてるんじゃないかな？」

「まつさかあ

ビチャツ。

笑い飛ばすルケアと頭に鳥の糞が掛かる誠治。

誠治は泣きたくなつた。

閑話 兄を訪ねて2

誠治が自らの運の無さにうなだれていた頃。

飛鳥は都内にあるDVDショップに来ていた。
しかしそこはある一つのジャンルを扱う店舗であった。

飛鳥が店内に入ると客達は驚き下を向く。
彼女のような美少女は此処ではかなり浮く。
しかし飛鳥は何の躊躇も無く店内を見て回る。

「居ませんか……」

飛鳥は落胆する。

この店は兄誠治が良く来る言わばお気に入り。
それを知ったのは勿論本人からではなく誠治の部屋から出た『III』の中のレシートから。
ストーカーと言ひ無かれ、総ては誠治を慕ひ想いからの行動である。

本人の意思は無視だが。

ある棚で足を止め一枚のDVDを手に取る。

『家庭教師のお姉さん』イ○リしてあげる』

ジッとそのDVDを見る。

「年上の何が良いんでしょうか……」

兄誠治の部屋を物色し出て来たDVDを分析した結果誠治は『年上のお姉さん』好きと結論づけた飛鳥。

愕然とした飛鳥だったが直ぐそれらのDVDを処分しそして『妹物』と取り替えておいた。

飛鳥に抜かりは無い。

「はあ…お兄様なら何時でも私を好きにしても宜しいのに。こんな物を見るのは腐れ童〇だけです」

そう言い残し飛鳥が店内を出ると密達は誰ともなく商品を棚に戻して行つた。

「次は『友人の所を訪ねますか…』

飛鳥の兄を探し求める旅はまだ終わらない。

10話 お人好しの冒険者

それはある昼下がり。

誠治とルケアは昼食を済ませギルドに向かっていた。

「姉さん気持ち悪くない？」

「何で？」

「いや大丈夫ならいいんだ」

こんな事を言うのは先程までの昼食の光景を思い出していったから。この世界の食事は意外と美味しく、塩などの香辛料はさほど貴重と言つわけではない、そのためか値段は安い。

よく見る異世界物では香辛料は貴重で味が薄いと言つていたので誠治には嬉しい誤算だつた。

そんな訳でついつい食べ過ぎてしまつ誠治なのだがルケアに比べれば大した事はなかつた。

テーブルに積み上げられた料理の山。

小さな身体でそれを次々と平らげるルケア。見ているだけで胸やけする程だつた。

「セイジは意外と少食なのね、駄目よ男の子なんだからしつかり食べなきや。冒険者は体が資本よ」

「体が資本ねえ……」

「何か異論でも？」

「滅相もない！」

ジロリと睨むルケアに慌てて何でもないと首を振る誠治。相変わらず自分の姿を言われるのを嫌うルケアである。

「きやあ！！」

突然目の前に女性が倒れてくる。

「おつと！？」

「え？え？」

辺りを警戒する誠治に何が起きたのか解らず困惑するルケア。

「しつこいだよ！！」

その女性を恫喝する声の主を見る。

冒険者風の男達が4人居る。

どうやらその男達が女性を突き飛ばしたらしい。

「そんな安い報酬で出来るか！？」

そう言い放つと男達は居なくなる。

「何なのアイツら！？」

「大丈夫ですか？」

「はい、済みません」

女性は誠治が差し出した手を握り立ち上がる。

「アイツら冒険者でしょ！？ギルドに通報しましょ！？」

ギルドに登録している冒険者には様々な規定があるのだが、その中に一般の住民に危害を加えてはならないとある。

内容次第では厳しい処分が下る時もある。

「いえ……私が悪いんです」

「事情があるんですね？宜しければ聞かせて貰つても？」

「姉さん！？」

誠治はルケアを伴いその女性から離れる。

「まさか関わる気なのか！？」

「見捨てられて言ひの？」

「さうは言わないけど、わざわざ自分から関わらなくていいじゃ
ないか」

「これも縁よ。そ、場所を移しましょ」

ルケアは渋る誠治を引つ張りその女性と一緒に歩き出す。

「どうぞ」

現在三人はその女性の家にいる。

女性はエルと名乗った。

栗色の長い髪に優しげな表情。歳は前の経験から聞かなかつた誠治
だが大体16～7歳位に見える。

ヒラヒラした空色のワンピースが似合っている。

「あつ美味しい」

「うん確かに」

誠治とルケアは出された飲み物を一口飲む。爽やかな香りが心地良い。

「それでどうしたんですか？」

「実はあの人達に採取の依頼を頼んだんです」

「ギルドを介してじゃなくて直接？」

「はい……」

基本的に冒険者に依頼を頼む時はギルドを介する。そうしないと途中で依頼を放棄されたり報酬が支払われなかつたりする場合がある。

「本当ならギルドに頼んだ方が良いのは解っているんです。でも報酬の額が用意出来なくて」

「因みに何を採取するんですか？」

「ゴールデンブルです」

「それは……」

「姉さんゴールデンブルって？」

「別名、魔力果実って言われる果物よ。万能薬の材料に使われる物で……確か一個200万キューエルはする」

「200万！？」

勿論それだけする理由はある。

まず数が少なく実がある場所がグルダの森の奥地。
其処にはグルベアーハーが群れをなしており非常に危険でBランクに相
当する依頼だ。

「払える報酬は30万キューエルで目一杯なんです。無茶は解つてい
るんですが母を治すには『ゴールデングル』がどうしても必要なんです」

エルは奥の扉を見やる。恐らく其処には母親が居るのだろう。

「お母さん病気なの？」

「はい……衰弱が激しくて此処一週間が山なのです」と、エルは沈痛な表情を見せる。

「しかしなあ……」

確かに氣の毒だと誠治は思う。

しかし同情だけでこの依頼は請けれない。

冒険者は報酬を貰い依頼を遂行する。

言わば報酬は命の値段と言つていい。

その報酬と命を天秤に掛け依頼を請けるかどうか判断する。

そしてエルの提示した報酬では天秤にすらならない。
非情でもこの依頼は請けるわけにはいかない。

「姉さん……」

そう判断した誠治はこの場を立ち去ろうと席を立つ。

ルケアは誠治の意図を察したのか顔を立ち上がる。

「エルさん私達に任せて……」
察していなかつた。

「おおい！？」

「ええ！？」

驚く誠治とエル。

驚く内容は違う。

誠治は「何言い出すんだ「イツ」」の驚き。

エルは「まさかこの依頼を請けて貰えるなんて」の驚き。

「必ず「ホールディングルは私達が持つてくるわーー！絶対お母さんを直
しましょーー！」

「ありがとーーーありがとーーー！」れいますルケアさんーーー！」
エルとルケア2人の手を握り合つ光景に誠治は頭を抱えた。

11話 餓犬

「馬鹿でしょあなた？」

「違うわよ馬鹿って言う人が馬鹿なのよ！！」

誠治は目の前で繰り広げられている子供の喧嘩に呆れながら眺めていた。

結局、ゴールデンブルを採取する事になった誠治とルケア。
無論誠治はルケアに考え直すよう言い続けた。
しかし一向に聞く耳持たないルケアに誠治は諦めた。この様子だとルケア一人でも行つて仕舞いかねない。
流石にそれは拙いので誠治も無理矢理納得した。

だが依頼を請けたはいいがゴールデンブルのある場所が解らない為、ギルドに調べに来たのだ。

丁度ナナが居たため、ルケアが「ゴールデンブルって何処にあるの？」と聞いた所で冒頭の言葉に繋がる。

「馬鹿だ馬鹿だと思つてたけど真性の馬鹿だったのね」
事情を聞いたナナだったが更にルケアを責め立てる。

「見捨てろつて言つの！？」

「やうよ

「！？」

予想していなかつた言葉に黙るルケア。

「困ってる人を助けるのは美德だけどいちいちそんな事してたら本当に死ぬわよ」

「で、でも……」

「あなたが死んだら最低でも私とセイジ君が悲しむ。あなたはそれでもいいの？」

「……」

ルケアは俯いたまま首を横に振る。

「なら今度からは必ず私に相談してね？」

「……うん」

力無くしかし、しっかりと頷くルケア。

そんな光景を誠治は感心しながら見ていた。

最初は喧嘩をして、次に一転優しく諭す。流石は幼なじみだけの事はあると。

ナナの方が年下なのだが。

「まあ請けたものはしじうがないわね」

「場所は解るんですか？」

「解らないわ。『ゴールデンブルの木の数は結構あるけど実際に実を実らせるのは数十年に一個か二個って言われてるから」

「じゃあどうすれば……」

「冒険者グループに案内役の派遣を頼んだら、ルケア、あなた『銀龍』に入つてたでしょ。あそこなら居る筈よ」

「えーと……」

「何?」

「クビになつたんだ姉さんは」

目を逸らすルケアを不審がるナナに誠治は溜め息混じりに言つ。

「あなた馬鹿なの?」

「うう……」

肩を落とし道を歩くルケアと誠治。

あれから『ゴールデンブル』の案内役を派遣して貰う為にあちこちの冒険者グループを訪ねていた。

案内役を派遣して貰うにはまずその冒険者グループに登録しなければならない。

が、ことごとく拒否されていた。

原因はルケア。

先日冒険者グループ『銀龍』の登録を抹消されたルケア。

その理由は既に広がつており好んでそんな厄介な冒険者を抱える所は無かつた。

2人は古ぼけた酒場に來ていた。

めぼしい所は全て周りこの場所が最後だつた。

「此處に入るの？」

あからさまに嫌そうな顔になるルケア。

「仕方ないだろ？」「

と言つものの誠治も乗り気がしない。

その酒場は見た目廃墟かと疑いたくなる程朽ちている。

ギイと軋む音をさせながら扉を開ける。

中は意外な程小綺麗で2人は内心ホッとするが、まだ陽は落ちていないのに薄暗い。

「客か？物好きもいるもんだな」

カウンターから声を掛けられる。

白髪白髭の痩せた男がグラスを拭きながら迎えた。

40代と言えばそうだし60代とも言わればそう見える。

「此處に『ゴーラングル』の場所まで案内出来る冒険者は居ますか？」

「ほう、そつちの客か。尚更物好きだな」

男はグラスに液体を注ぐと2人の前に差し出す。

「ようこそ『餓犬』へ。私は代表のグラントだ」

冒険者グループの名称は現実に居る魔物の名を使う。

どの魔物の名を付けるかによってその冒険者グループの指針が解る。

『銀龍』は伝説の龍。神々しいその姿から別名『神龍』と呼ばれて

いる。

『餓犬』は誠治の世界で言えばハイエナのよつた存在。大して強く無いが狡猾で他の魔物から獲物を横取りしたりする。

そんな魔物の名を使うこの『餓犬』は自虐的な集まりと言える。

「『ゴールデンブル』か……居るには居る。だが高いぞ？」

「因みに幾ら？」

「200万キュエル」

「えー……」

ゴールデンブルの市場値は約200万キュエル。つまりそれを売つたとしても利益は出ない。勿論30万キュエルでは話にならない。

「それで構いません」

「セイジそんなお金……」

「あるにはある」

現在誠治とルケアの全財産は250万キュエル。ハッキリ言ってかなり厳しいが案内なしに比べれば仕方なしだ。

「では前金で50万キュエルだ」

誠治は懐から銀色の円形硬貨を五枚出し渡す。

「ふむ確かに、では早速会わせよう。サリュア仕事だ！！」

「うるさい……聞こえてるよ……」

女性の怒鳴り声が奥から聞こえてくる。

「全く…… ゆつくり眠れやしない」

「文句言わずにサッサと出て来い」

女性が頭を搔きながら出てくる。
赤いおさげ髪。 美人と言えば美人だが目つきの悪さでキツい印象を受ける。

「お、お前は……」

「どしたのセイジ？」

誠治はその女性、サリュアを見た瞬間叫んでしまつ。

「何だい人の顔を見るなり失礼……」

サリュアは誠治を凝視し、止まる。

この異世界に来て初めて遭遇した人物であり、そして誠治をグルベアーの囮にした人物。
サリュアとの再会だつた。

12話 ゴールデングル

翌日。

サリュア、ルケア、誠治の三人は「ゴールデングルを目指しグルダの森を進んでいた。

先頭をサリュアが行き次にルケア、殿を誠治が務める。行程は問題無く明日には目的地に着く予定だ。

「ここで野宿よ」

開けた場所に出るとサリュアはそう言つて止まる。

「ふう～疲れたあ～」

「じゃあ薪を拾つてくれるか」

「よろしく～」

両足を投げ出し、だらけるルケアを余所に誠治は一人から離れる。

思つてもいなかつた再会をしたサリュアと誠治。実はこの二人あれからまともに話していない。

サリュアは見捨てた罪悪感からの気まずさだが誠治は今更その事で何か言つつもりはなかつた。しかしだからと言つて気軽に話しかけも出来ないでいた。

もしルケアにあの時の事を知られれば面倒な事になるのは目に見えている。

そんな訳で誠治はサリュアとは極力話さない事にした。

どの道この依頼が終わればサリュアと会つ事は殆ど無いだろうと思っている。

夜になりグルダの森は闇に包まれる。
地面がゴツゴツして寝れないと言っていたルケアは既に夢の中。
そんなルケアとは別にサリュアと誠治は焚き火を間に挟み気まずい時を過ごしていた。

「恨んでる?」

不意にサリュアが話しかけてくる。

「うーん…正直よく解らん」

「何それ?」

誠治の言葉が理解出来ず首を傾げる。

「もし自分がアンタの立場だつたらと考えてね」

誠治は焚き火に薪を放り込む。

「グルベアを倒せない、逃げるのも困難。でも死ねない、死にたくない。そう考えると……まあしじょうがなかつたのかなと」

「随分なお人好しね」

「違うよ、面倒が嫌なだけだ。なんなら此處でアンタに罵詈雑言吐こつか?」

「遠慮しとく」
サリュアは肩を竦める。

誠治はよく周りから『人が良い』と言われる。
しかし誠治は違うと思っている。

清十郎という変わった身内はいるが誠治自身は平穏を望んでいる。
面倒事は極力避け首を突つ込まないようにしている。困つてる人が
居ても緊急性が無ければ無視するし、今回の依頼も請けるつもりも
なかつた。

では何故今此処いるのかと言うと、誠治が拒否しても『真性お人好
し』のルケアは1人でも行つてしまつ。流石にほつとく訳にはいか
なかつた。

そう言う意味で言えば誠治もお人好しかも知れないが。

「所で『ゴールデングル』はありそなのか?」

「あなた運は良い方?」

「……いや。だけどルケアは良い」

「じゃあ有るんぢゃない?私も運が良いし。何せあのグルベアーか
ら逃げれたからね」

ニヤリとするサリュアに苦笑いでしか返せない誠治だった。

「次が最後よ」

翌朝。

再び歩き出した三人は昼前に「ゴールデングル」と予想される場所に到着していた。
しかし其処には無く、他の場所にも移動したが結果は同じだつた。
次に行く場所がサリュアの知る最後で無ければそのまま帰還する事になつてゐる。今まで運良く強力な魔物に遭遇していないものの、何時遭遇するか解らないからだ。

「あつ…」

最初に見つけたのはルケアだつた。

「ふう、やつぱり運が良いわ私
サリュアがホツとし呴く。

「あれがゴールデングル…」

誠治もそれに気づいた。

目線の先には枝に実つた一つの果実。
形は林檎のようだが色がその名の通り黄金色だつた。
光に反射し神々しいまでの存在感を示すその果実は明らかに普通の
果実とは違つてゐる。

「やつたーーー！」

ルケアは飛び跳ねんばかりに喜び走り出す。

「姉さん走つたら……」

転ふぞ、といい掛けた時ルケアの身体が空に浮き吹き飛ばされたよ

うに誠治に向かい飛んでくる。

「姉さん！！」

突然の事だつたが誠治は何とかルケアを受け止める。

「姉さん！姉さん！」

誠治が呼び掛けるが返事は無い。

ルケアの額からは血が流れグッタリとしている。
「薄汚い人間がそれに触れるでない」
誠治はその声の主を見やる。
20代位の青年。長い銀髪に赤い瞳。全身を黒いマントで覆っている。

「それは我が種族にこそ相応しい物だ」
青年は愉快そうに言い放った。

13話 ヤマガミ

その姿をサリュアは知っていた。
いや、正確に言えばその姿を特長とした種族を知っていた。

「バンパイア…」

この世界の全人口7割は人と言う種族であり、残り3割が別の種族となる。

その種類は様々で数えればキリがないほど。

その中にバンパイアと言う種族がある。

人より優れた身体能力を持ち、大多数のバンパイアが魔法を行使出来る。

大昔に1人のバンパイアが万に近い人を惨殺した事もあった。

今はそんな事は無くあまり人と関わらなく見かける事は無い。

しかしその余りな強力な力な為恐れている人は多い。

そしてバンパイアには共通した外見的特長がある。一本一本金属の糸のようないわゆる銀髪に血のようないわゆる赤い瞳。

そう、目の前に居る青年のような。

「何のつもり！？」

サリュアは極力平静を装つて話しかける。

「この娘がゴールデンブルに触れようとしたからだ」

「それだけで？」

「これは貴様等のような種族が気安く触れていい物ではない。これは我ら気高きバンパイアに相応しい物だ」

ゴーレデングルは万能薬の材料でもあるが別名『魔力果実』とも言われ、浪費した魔力を回復出来る。

バンパイア等魔法を使出来る種族からすれば食べるだけで魔力を回復出来るゴーレデングルは彼等にとっても貴重な物なのだ。

その事はサリュアも知っていた。

しかしバンパイアに遭遇するなど思いもしなかつた。

グルダの森でバンパイアに遭遇したなどサリュアは聞いた事がなかつた。

今回のこれは完全なイレギュラーであった。

「…………そう、解つた。私達は諦めるから帰らせて貰つわ
相手がバンパイアである以上戦うという選択肢はない。
逃げても背後から魔法を撃たれるのがオチ。
ならゴーレデングルは諦め見逃して貰うのが一番の得策。

「ほつ…………聞き分けが良いな。良かろう、サッサと居なくなれ」

「ええ……セイジ？」

サリュアは退こうと誠治を見る。

しかし誠治はグッタリとしているルケアを抱きかかえ動かない。

「何してるの行くわよ！！」

バンパイアの青年の考えが変わる前に此処を去りたいサリュアは苛ついた口調で言う。

「…………駄目だ」

誠治はそう呟きルケアをそつと地面に下ろす。ルケアの呼吸と脈はシッカリしており、額の傷もそう深くはない。

「何がよ？ あなたまさかバンパイアと戦つ『氣』…？」

「爺が感情に支配されるなつて言つてたけど…………駄目だ」
誠治はバンパイアの青年を静かに見据える。

「あなた馬鹿！？ 人がバンパイアと1対1で戦つて勝てる訳ないでしょ！？ 相手が見逃すつて言つてるんだからくだらない意地なんか張つてないで逃げるわよ！…」

「まさか俺に少年漫画の主人公みたいな心があるなんてな」 誠治は氣を失い眠るルケアを見る。

「姉がやられて弟が黙つてる訳にはいかないからな。おいアンタ！
！名前は！…」

「名だと？ まあよい我が名はジエスメリン・ダース」

「じゃジエスメリン、ぶつ飛ばすから」

「…………何？」

「ちょっと何言つて！？」

二人を無視し誠治は呼吸を整え氣を全身に巡らせる。
この世界に来てから誠治は何度か氣を試してみた。
どういう理屈かは解らないがこの世界で氣を使うと元の世界の最大

約三倍の効果があった。

誠治は100メートルを12秒前後で走る。

バンパイアの青年、ジェスメリンとの距離はおよそ20メートル。

誠治はジェスメリンに向かい駆け出す。

「消え…！？」

ジェスメリンは田を疑つた。

田の前に居た人族の青年が消えたからだ。
いや正確に言えば消えたように見えたのだ。

「ぐはあっ…！」

腹部をとてつもない衝撃が襲いジェスメリンは吹き飛ばされる。
木をなぎ倒し50メートルは飛ばされた所でよつやく止まる。

「え？」

サリュアは田の前で起きた光景について行けず田を点にしてくる。

「ぎ、貴様ああー…！」

ジェスメリンは立ち上がり空に向かい怒鳴する。

「意外と丈夫だな」

そんなジェスメリンの様子にも誠治は動じずサラッと言つ。

「許さん…！…許さんぞ…！…人の分際で我の身体を傷つけるとわ…！」

鬼の形相で誠治に手をかざす。

「死ねい…！」『風よ…！…』

見えない風の刃が誠治を襲つ。

しかしもう其処に誠治は居なかつた。

「遅い」

不意に聞こえた誠治の声にジェスメリンは慌てて顔を向ける。

「ぐげえ！」

グシャツとした音と共に横つ面を殴られたジェスメリンはそのまま地面と激突して動かなくなる。

「何が起こつたの…………？」

サリュアの目にはまだジェスメリンが吹き飛んでいく事しか解らない。

とは言つても誠治のした事は単純な事。
相手が何かする前に殴る。

ただそれだけ。

最初の攻撃時に誠治はジェスメリンに接近したが20メートルあつた距離を2秒と掛からなかつた。一回目もジェスメリンが魔法を擊つ前に接近し殴つただけ。

誠治は清十郎から武術や武道等は一切習つておらず身体能力の鍛錬と氣の扱いだけを習つた。
つまり氣で強化した身体能力でただ殴つただけなのだ。

魔法は確かに脅威だが撃つ前に倒してしまえばいいだけの話だつた。

「さて、帰るか」

誠治はジェスメリンをもつ見もせず、ゴールデンブルをもぎ取りバッグに仕舞う。

「あなた強かつたの？」

「多分な。ただ家の爺には勝てんがな」
この世界での氣の強化は凄いが、それでも清十郎に勝てる氣がしない誠治だった。

「じゃああの時のグルベアー……」

「ああ倒したよ」

「言えば良かつたじゃない倒せるつてー? それなら逃げなかつたのに」

「あの時は解らなかつたんだよ」

「でも……」

「しつ……ちつ、囲まれてる」

まだ言い足りないサリュアを制し周りを伺う誠治。さつきまで無かつた気配が少なくとも10以上ある。誠治はルケアを抱きかかえ辺りを警戒する。するとサリュアと誠治を取り囲むように計15人が姿を現す。その姿は皆銀髪に赤い瞳。

「う、嘘」

サリュアは絶望に氣を失いそうになる。あのバンパイアが15人。その氣なら一つの国をも滅びす事が出来る程の人数。

「合図したら姉さんと一緒に逃げてくれ」

誠治はルケアをサリュアに預ける。

「あなたまさか…」

「他に策はあるか?」

誠治が囮となる一人を逃がす。

奇しくもサリュアと誠治が初めて会つた時と似た状況。ただ今回のほうが格段に状況が悪い。

「……解った」

「よし行くぞ。1、2、3…今だーー!」

「お待ち下さい」

と、一人のバンパイアが前に出てくる。

4~50歳位の男性。

毅然とした雰囲気で執事のような印象を受ける。

「ヤマガミ様ですね」

「!?……何故知ってる?」

その言葉に誠治は動搖してしまつ。

セイジの名ではなくヤマガミで呼ばれた事に。

ヤマガミを名乗つたのはルケアとギルドの登録した時だけだ。しかも此処は異世界、ヤマガミなんて性は恐らく無いからだ。

「我ら一族の者がヤマガミ様のお仲間を傷つけた事を深くお詫びいたします」

その男が頭を下げると他のバンパイア達も頭を下げる。

「一体……」

分けが解らない誠治とサリュアはただ唖然とその光景を見ていた。

「我々はあの者を回収しに来ただけですので、ゴールデンブルはお持
ちなつて結構ですので」
それではと軽くお辞儀をした男は立ち去り、15人のバンパイアとジ
エスメリンは居なくなつた。

「喜んでたねエルさん」

「ああ」

ルサカの街に戻つたルケアと誠治は、ゴールデンブルをエルに届けた。

エルは一人が恐縮する位涙ながらにお礼をした。

ルケアの頭には包帯が巻かれている。

氣を失う寸前の時の事をルケアは覚えておらず、誠治は木に頭をぶつけたと説明した。

本当の事を言つ必要ないと誠治は判断した。

何故あのバンパイアは自分の姓であるヤマガミを知つていたのか?
しかも様付けで呼んでいた。

此処は異世界。自分は勿論家族が関わつているとはとても思えない。

「どうしたのセイジ?」

「ん、あーナナさん怒られるなつて。ほら姉さん怪我したから」

「あーーー…やうだつた…どうしよう…」

どんよつけのルケアをセイジは慰めながらギルドへ向かった。

閑話 兄を訪ねて③

「お待ちしておつました」

此處はとある喫茶店。

飛鳥はある二人に集まつて貰つていた。

「あーすかちやん 相変わらず可愛いねえ」「
軽薄そうな青年が手を振りながら飛鳥の隣に座る。
彼は笹川 信彦。

「ゴメンね遅れちゃつた」

人懐っこい笑顔を浮かべ飛鳥の向かいに座る女性。
彼女は姓名 京子。

「用事があるんだからさつさと済ませなさいよ」

機嫌悪そうに京子の隣に座る女性。

彼女は三宅 香。

皆が注文したのを見計らい飛鳥は話し始める。

「皆さんにお集まり頂いたのは他でもありません。実は兄の行方が
解らないのです、心当たりはありませんか?」

「え? 行方不明って事? 大丈夫なのそれ?」

京子は初耳なのか驚いた様子。

「あの野郎、旅行の待ち合わせをすっぽかしたから文句言つてやろ

「うと電話しても出ないと思つたら……」
信彦は思々しそうに携帯を見る。

「……」

香は黙つて飛鳥の話を聞いている。

「うですか。私とお爺様以外の人と会つた可能性があるのは皆さんがと思つたのですが……」

飛鳥は落胆したのか深い溜め息を吐く。

実はこの三人、誠治と旅行に行く予定だつた。
寸前で誠治が清十郎に攫われた為中止になつたが。

「逃げたんじゃないあなたから?」

「……意味が解らないのですが?」香の言葉に飛鳥は冷静を装いながら聞き返す。

「ゴメンね飛鳥ちゃん。最近、香寝不足らしいのよ
慌ててフォローする京子。

「どいかの変態な妹に言い寄られて迷惑だつたからじゃないの?」
しかし香は飛鳥を睨んだまま言い放つ。

「兄はそんな素振り見せませんでしたが?」
飛鳥は香の視線から目を離さない。

喫茶店内はピリピリとした空気になる。

実は飛鳥と香は過去何度も会つてゐるのだが毎回同じのような雰囲気になる。

兄を愛する飛鳥に誠治に好意を抱く香。仲が悪いのは必然と言える。

「大体ブラコンなんて気持ち悪いのよ……」

「あなたが気持ち悪がっても私には関係のない事です」

「あなたがどんなに誠治君の事を好きでも報われない……誠治君は倫理観のしつかりした人だから……」

「確かに。でも私には切り札があります」

飛鳥はニヤリと口元を歪ませる。

「私達は兄妹ですが血は繋がっていません」

「何ですって……」

あまりのショックにテーブルを叩き立ち上がる香。

「そんな事此処で言つて良いのかしら……」

止める事の出来ない京子はアイスティーカップを飲みながら呟く。

「まあまあ飛鳥ちゃん落ち着いて……」

「触らないで下さい」

肩に触れようとした信彦の手首を掴み一回転し捻る。

「肩が……肩が……」

ポコッと何か外れる音がしたあと信彦は肩を押さえ転げ回る。

「そんな訳ですので、私は手段を選ばずに必ず兄を陥落してみせま

す

「ぐぬぬぬ…」

「肩がーーー！ 肩がーーー！」

「アイスティー 美味しい！」

勝ち誇る飛鳥に悔しかる香
未だ床を転け回る信彦に我関せずの京
子。

注意したい店員たかとは、せりを恐れ近寄れなして、いた。

「だったら私が先に誠治君を見つけて保護するわ！！」

「やつてみたら如何ですか？まあ無理でしあうけど」

「私が誠治君に真っ当な恋愛を教えて真っ当な道に戻す！－行くわよ京子！－」

「はいはい。その前に買い物付き合つてね」

勢い良く喫茶店を出て行く香に、引っ張られて行く京子。

「お兄様を見つけるのは私です……」
飛鳥は決意に満ちた目をし席を立つ。

「肩が
肩が
」

残つたのは肩が外れた信彦とその対応に困り果てている店員だけだ
つた。

14話 戦姫クリアベル

ゾクッ

「どうかしたセイジ？」

「何か寒気が…」

「風邪？」

「いや違つと思つ多分…」

誠治とルケアは朝食の後、街を散策していた。
ルケアの怪我は大した事はないのだが念のため数日の間、ギルドの依頼を請けない事にした。

良い機会なので薬や保存食の補充や装備の点検にあてる事となつた。

「いつもより人が多くないか？」

店に装備を預けた誠治とルケアは街の大通りを歩いているのだが明らかに人が多く混雑している。

「うん、何だろ?」

「あのねえ、あなた達冒険者なんだから情報ぐらい仕入れときなさい」

二人して首を傾げているといつの間にか居たナナが呆れたよつに言

つてくる。

「あつナナ」

「今日あの戦姫が来るのよ

「戦姫つてあのクリアベル様！？スッゴーイー！何で！？何で！？」

「何でも魔物討伐の帰りとかでルサカに滞在するらしいのよ

「間近で見たいなあ～」

「有名…………何だよな？」

はしゃぐルケアを余所に誠治は聞いた事の無い如に首を傾げる。

「セイジあなたまさか知らないの？」

「えーと…………はい」

「あのファマル王国の第一王女にして戦姫と言われているクリアベル・ファルマーラーを知らないの！？」

「ざ、残念ながら

ルケアの勢いに若干引く誠治。

「全く…………何処の田舎から来たの？」

「あははは……」

「まあいいわ。クリアベル様はあの英雄の血を引くお方なのーー！」

「…………あの英雄？」

「そこからー？」

オーレム大陸には五つの王国がある。

ファマル、グラダナ、ブリージュ、レスレイン、ザラ。

遙か昔からこの五つの王国はオーレム大陸の霸権を争っていた。

100年程前からは表立った戦争は無いものの国交は断絶しており
友好とは程遠いものだった。

そんな時50年前に異変が起る。

魔物を従え王国を襲う存在。

名をココノツ。

その力は凄まじく五つの王国を蹂躪しオーレム大陸は誰もが終わり
だと絶望した。

突如として現れたココノツに絶望した民達は同じく突如として現れ
た英雄に希望を見いだす。

名をジュウセイ。

ジュウセイは協力を拒む五つの王国を説得し手を組ませ、それぞれ
五つの王国の姫達を従者として引き連れココノツ討伐に挑む。

そして見事ココノツを倒したジュウセイは五人との姫との間に子を
成した。

誰もがジュウセイがオーレム大陸の王になると信じていた。
しかしジュウセイは姿を消した。

大陸全土を捜索したもののジュウセイの行方は解らなかつた。それ
からオーレム大陸ではジュウセイを英雄として讃え、五つの王国は
積極的に国交をし友好的な関係を今も続けている。

「…………と、これがこの大陸に語り継がれている『英雄譚』よ」

「へー」

三人は場所を食堂に移し話している。
因みに誠治に説明していたのはナナ。
結局ルケアは面倒になりナナに任せていた。

「本当に知らなかつたの？オーレム大陸じゃ小さな子供でも知つて
る話よ」

「うーん、当たり前過ぎて話すの忘れてたんじゃないかな？」

「香氣ねえ」

「まあな」

「ん？どうやら来たみたいよ」

食堂内が騒がしくなり人が次々と外へ出て行く。

「セイジほら行くわよ！？」

ルケアに突つつかれ通りに出る。

道の両端は人で溢れているが真ん中だけがポツカリと開いている。

「来たぞ！！」

「きやーーー！」

周りから歓声が上がる。

やつてきたのは馬に乗る鎧姿の人が10人。

一際歓声を浴びているのは先頭を行く女性。

光に煌めく金髪に宝石のような蒼い瞳。銀に輝く鎧に身を包むその姿はまさに神話の世界から飛び出してきた戦乙女。

「見えない…………」

人の壁に阻まれガツクリとするルケア。

「しょうがない、ほら」

「え、きやあ！」

見えるようにとルケアを肩車する誠治。

「子供じゃ……あつ！？クリアベル様ーーー！」

文句を言おうとしたルケアだつたがクリアベルが視界に入った途端手を振り歓声を上げる。

「あれが英雄の血を引く姫様か……」

誠治はクリアベルを見ている。

容姿は抜群に綺麗だし美しい。

しかしそれ以上に誠治が感嘆したのはその存在感だった。まるで彼女だけにスポットライトが当たつているように輝いて見える。

「強い…」

誠治はクリアベルの実力はかなりの物だと確信する。騎乗するその姿に隙はない。

武器は背中に背負う大剣なのだろう。本来彼女には似つかわしくない武器だが違和感はない。

「さやあーーー！クリアベル様と皿が合つたあーーー！」

「もう良いだろ？姉さん？」

「まだまだほら追つてーーー！」

「はいはい

この後はしゃぐルケアに付き合わされた誠治だった。

「ふう、今日は良い一日だつたわあ

「俺は疲れたよ。姉さん見た目より重いんだな、肩が痛いよ

「女性にそんな事言つんじやないーーー！」

夕食を終えた後誠治とルケアは宿に向かっていた。
すっかり陽は落ちたが、歩く大通りはまだ賑わっている。

「やつぱりクリアベル様格好良かつたなあ～」
思い出しウットリするルケア。

「姉さんてそつち系？」

「あのねえ……憧れよ憧れ。まあムサイ男より綺麗な女性の方がいいけど。あつセイジは大丈夫よ」

「へーへー」

「むー可愛げ無いわね。ここは顔を真っ赤にして照れてよ」

「次はそつするよ」

「もつ」

頬を膨らませ走り振り返る。

「セイジと会つてまだ14日なんだね。何か昔から一緒に居るみたい」

「色々あつたからなあ……」

誠治がこの世界にきて一週間。

その日々の密度は元の世界とは比べ物にならない程濃くそして充実していた。

「これからも宜しくね」

「ああ、此方こそな」お互い照れたよつて微笑み合へ。

「そうだ、姉さん先に宿屋に戻つといてくれるか。忘れ物したみた
いなんだ」

「何やつてんの。解つたわ」

「早く戻つて来なさいよ」と言い残しルケアの姿は見えなくなる。

誠治は来た道を戻らず横道に入る。

すると賑わっていた大通りとは一転し其処は静寂が支配していた。
暫く進み止まる。

「出て来たらどうだ?」

誠治は夕食後、ずっと後ろにある気配に気づいていた。

元の世界で動物を狩つていた誠治にはさほど難しい事ではなかつた。

ルケアの方かも知れないと思つていた誠治だったが気配はルケアで
はなく誠治に付いたままだつた。

宿を知られるのは不味いと判断しじつして誘い込んだのだ。

「流石はヤマガミの者だな」

「な!?」

現れた人物に誠治は驚愕した。

服装は見覚えの無い蒼の上着にズボン。しかしその容姿と背中に背
負う大剣には見覚えがあつた。

「ク…クリアベル…様?」

「そうだ」

クリアベルは大剣を背中から軽々と抜き誠治に剣先を突きつける。

「お前に聞きたい事がある」

クリアベルは獰猛な笑みを浮かべる。

「清十郎は何処に居る?」

「清十郎は何処に居る」

誠治は出掛けた言葉を呑み込んだ。

「何故？」等口にしようものなら清十郎を知っている事にある。

クリアベルが清十郎とどんな関係でそして何故居場所を聞くのか解らないが、この様子からすると穏やかな理由ではないのは解る。まして誠治自身が清十郎の孫だと知られればどんな目に遭うか……。

「え」と何の事やら私にはサッパリ……」

知らない振りをするのが一番と誠治は判断した。

フォンツ。

大剣が振られ誠治の前髪が数本ハラリと落ちる。

「私を前にして惚けるとは良い度胸をしている」クリアベルは大剣を構える。

「腕の一本でも切り落とせば話す気になるだろ？」クリアベルの気迫が誠治に向けられる。

(不味い本気だ！?)

これは脅しではないと理解する。

選択肢は二つ。

一つは素直に話す。

しかし「清十郎はこの世界とは別の世界に居る。けど行き方は解らない」と言つて素直にそつですかで済むとは思えない。下手をすれば捕まり拷問される事も予測がつく。

「一つは戦う。

ハツキリとクリアベルの実力は解らないが負ける事はないと誠治は思つ。しかし負ければ恐らく牢に入れられ、勝つても一国の王女であるクリアベルを傷つけたとなればタダで済むとも思えない。

（選択の余地無しか）

誠治は全速力で逃げ出した。

「…………ま、待て！？」

慌てて後を追うクリアベル。

「まさか躊躇無しに逃げるとはー？」

クリアベルにしてみれば誠治が素直に話すとは最初から思つていなかつた。

だが言い訳も戦いもせず逃げ出すのは予想外だった。

「貴様逃げるなど恥ずかしいと思わんのか！－！」

（生憎俺は何とも思わん！－）

状況によりけりだが誠治はあまり意地やプライドは無い。

清十郎から常に平常心でいる事を徹底させていたし元々誠治自身も拘らない。

女性から一田散に逃げるのは普通の男なら躊躇つだらうが誠治はそ

れが最善の策なら躊躇無く選ぶ。

誠治は大通りに出て未ある人混みに突っ込む。

兎に角何処かで身を隠しクリアベルを撒く事にする。

誠治は再び横道に入り隠れ場所を物色する。

「何してるのあんた？」

声をかけてきたのはサリュアだった。

屋台で買つたであろう肉串をモシャモシャと咀嚼している。

「これから大剣を振りかざした女が俺を探しに来るだらうけど知らない振りをしてくれ！！頼む！！」

「ちよ、ちよっと！？」

サリュアの返事を待たず誠治は道端に落ちていた布を被り身を隠す。

「何なの…………つて本当に来た！？」

誠治が来た方向から大剣を持った女性が凄い形相でやつて来る。

「あなた此処に男が逃げ込んで来なかつたか！－！」

「えーとそれなら……」

何でこんな事をとサリュアは心中で愚痴りながら指を明後日の方へ向けようとする。

「これで……」

クリアベルはサリュアの手に一枚10万キュエルの円形硬貨をそつと握らせる。

「此処です」

指を刺したのは直ぐ側にある布切れ。

スドオオノツ！！

間髪入れず大剣を振り落とすクリアベル。

誠治は転がりながら何とか避ける。

「サリュアー！！！でんめえー！！！」

「観念して清十郎の居所を吐けえ！！！」

逃げる誠治を再びクリアベルは追つて居なくなる。

「「ゴメンねセイジ、私お金の味方なの。さあてと美味しいお酒が飲めるわあ」

「しまつたー？」

「もう逃げられんぞ。さあどうする？」

袋小路に嵌つてしまつた誠治にクリアベルがジリジリと迫る。

「だから人違いですって…」

「ぬうんだよ」

「？」

「英雄の血がお前から匂つんだ」
クリアベルは忌々しそうに言つ。

「昼間大通りでお前を見た瞬間解つた。お前は私と同じ英雄の血を引く者、山上 清十郎の血縁者だと……」

「爺が英雄！？」

あまりの驚きに叫んでしまう。

「清十郎の血を引く者は王国が全て把握している。しかしお前を見つけた後調べてみるとこんな所で冒険者などしている者は居ない。つまりお前は清十郎の居る世界から来た」

「…………」

「限られた者達だけだが、清十郎が異世界から来たのは知られている。さあ吐け！！清十郎は何処だ！！いや、清十郎の居る世界にはどう行けばいい！！」

「…………知らない」

「何？」

「俺は確かに爺の血縁者だ。でもこの世界には偶々来ちまつただけで帰る方法は知らない。寧ろ教えて欲しい位だ」
誠治は惚けるのを止めた。

「これだけの事を相手は知つていてそれを誠治に話した。
もう知らぬ存ぜぬでは通らない。」

「ふつ、どうしても喋らぬか。ならば身体に聞くだけだ」クリアベルから強烈な殺氣が誠治にぶつけられる。

「やつぱりこうなるのか…」

本当の事を話したがそれをクリアベルが信じるかは話は別。誠治はクリアベルと戦うのを決心し構える。

「ほつ…やつとその気になつたか」

嬉しそうに呟くクリアベル。

（爺が英雄！？何だそりや！？しかもこの王女様とは親戚同士！？あ～もう訳解らん！～元の世界に戻れたら絶対爺をぶつ飛ばす！…）

混乱状態の誠治だが今はこの状況を潜り抜けなくてはならないと頭を振る。

「はああああ…！」

「おおお…！」

掛け声ともに踏み込む二人。

しかし突如誠治の身体が光だす。

「くつ！？貴様何をするつもりだ！？」

眩しさに手を翳すクリアベル。

「な、何だ！？」

突然の事にただ戸惑う誠治だが光は益々強くなる。

「うわああああ…！」

「くううううーーー。」

光が収まつた後其処には誰も居なかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7713w/>

英雄の後始末

2011年10月29日15時04分発行